

A manga cover illustration featuring two male characters. On the left, a man with dark hair, wearing a dark suit, white shirt, and dark tie, looks towards the right. On the right, a shirtless man with short, light-colored hair and a serious expression looks back at the first man. He is wearing tan trousers and has a small red flower tucked into his waistband. The background is a blurred city street at night. The title '極道の愛人' is written vertically on the right side in large, stylized red and pink characters with a blue decorative border.

極道の愛人

泉美アリナ 著
イラスト 羽田共見

極道の愛人

《立読み版》

泉美 アリナ

イラスト 羽田 共見

プロローグ

「ねえ、道哉とあんたのボスがくつついちゃったから、うちらもそういう関係になつてみる？」

ホストクラブのオーナーの三春一美は、みはるかすみ極道の若頭相手にそう提案して誘惑してみる。

それはまるでいいことを思いついたという程度の軽い気持ちであり、なおかつ、彼が男にベッドに誘われて慌てるところを見てやろうという悪戯心もあったのだ。

「俺は構わないぞ」

一美の誘いに答えたのは、竜美組の若頭、たかみかずき高見和輝である。

こわもて強面で視線が合うと怯えてしまうほどだが、よくよく見ると、いや、見なくてもかなりの美形で魅力的である。

そしてまた極道ならではの迫力もあるからやっかいな相手である。

一美はあつという間に強引にホテルへ連れ込まれ、考えるひまも逃げる隙も与えない。これは、相当手馴れているなと一美は、おかしいなと思いつながら高見をからかった。

「だよね。竜美組の若頭は男にモテそうでもないな」

一美は、高見に平然と軽口を叩いた。

しかし、内心では「おや？ そう切り返してくるか」と意外に思っている。

それでも心の内はおくびにも出さず一美は相手の返事に乗った。

「さあ。な、野郎には慕われているとは思っているが、もてると思ったことはないな」
またしても高見は生真面目に答えた。

もしかして、高見はすでにふざけているのではないだろうかと一美は思った。

裏社会の男はとかく男にもてるものだ。

高見相手なら、抱いてほしいと泣いてすぎる夜の男なんてごまんというはずだ。

その証拠に、組長の佳孝も女にもてる。そして、男にもてる自覚はあるのだろう。

新宿歌舞伎町にあるホストクラブ「マーズ」で、同じく美形のナルシスト系に誘われることもあるからだ。

そんな時、佳孝は冗談を口にして彼らを軽くあしらっている。

それを横で見ている高見にも別の方向から熱い視線を送るアイドル顔のホストがいることに気づいていないのだろうか。

一美は首を傾げて高見を見上げる。

「えーと、あの、もしかして男相手は、初めて？」

「ああ、なにか問題があるか？」

そう高見が返事した時には、気づけば一美はベッドに押し倒されていた。

「ちょ、ちよつとストップ！ 待って！ 俺だって初めてだよ、だから冗談はこのくらいにしてその手を離してくれない？」

高見に冗談が通じないと、一美はこの時になってようやく気がついた。

互いに相当呑んでいて酔っ払っている自覚がある。

だからこそ、男と寝てみるかと誘った一美に、かたぶつ堅物の高見が冗談言うなど半ば本気で嫌がる彼に向かって続けてこう言うつもりだった。

「あんたんとこの組長が男とくっついたんだ。それを男なんて冗談じゃないというのは失礼だろ」

その時、高見が言葉に詰まれば一美の勝ちだと思っていた。

自分の主人といていい組長が、男に走ったと認めたくないが、若頭の自分が見捨てるわけにはいかないと高見なら思うだろう。

難しい顔をして、きつとなにか言い訳を口にするはずだと一美は思っていた。

高見の困った顔を見れば一美だって満足できるはずだった。

そうすれば、

「じよ、冗談だよ、高見さん」

と言って笑って、この話は終わるはずであった。

高見の鉄面皮が、少しでも剥がれるところを見れたら、してやったりと思えたに違いない。

だがしかし。

今はその台詞の重みが予想とはかなり違うことになっている。

「じよ、冗談だって……、ちよっストップ、若頭」

ベッドの上に背中から押し倒された一美は、正面上から体軀のいい高見に迫られる。

首筋に彼の息が掛かって、慌てた一美は彼の肩を押し返した。

「俺は冗談にするつもりはない」

高見は僅かに顔を上げ、一美の顔を見つめ返してくる。こんなふうの間近で高見の顔を見るのは初めてだ。いい男だな、と一美は思いかけて、はっとする。

見蕩れて流されたらいけないと、ぶんぶんと頭を振った。

「……えーと、あの二人に触発されてあんたも男に目覚めたとか？ それなら男相手がうまいホストを紹介するよ」

あの二人というのは、一美の幼馴染と高見のボスである佳孝のことである。

そして彼らは恋人同士の間柄であった。

「必要ない。男に目覚めたというならそうかもしれない。だが、俺が興味あるのはおまえだけだ。他の野郎を抱きたいとは思わない」

「え？ 俺って抱かれる側なわけ？」

必死に相手を押し止めようとした一美は、逆に呆氣にとられて聞き返す。

高見が魅力的に笑った。

「悪いな、それは譲れない。俺は抱く側の経験しかないからな」

「えーっと……。いや、ちょっと待って……」

こんな時だけ、往年の映画スターのように渋い表情をするなんて狡いと一美は思う。

「悪いな、それもできない。もう我慢が効かないんだ」

「あ、嘘、ちよ……」

一美の上に重なった高見の腰がぐいっと押しつけられる。

熱いその塊に、一美はびくりとした。

「な、なんで……、あ、足に、なんか硬いもんが当たってるんですけど……」

「悪いな、おまえを押し倒したらこうなった」

「ちよ、ちよつとまってよ高見さん、なんの悪ふざけ？」

一美はもはやおろおろと言葉を詰まらせながらベッドの上でジタバタと暴れはじめた。

高見は一美の両手首を掴み頭上でシーツに押し付けてしまう。手の自由を奪われた一美は、少し怯えてひくりと喉を鳴らした。

「どうした怖がるなよ？ 一流のホストなんだから？ 俺を誘ってみろよ」

高見は、一美の耳元に囁くと、続いて耳朶に唇を寄せた。ピクンと一美の体が跳ねる。

そうして、高見の台詞に一美はさらに頬を震わせ鼻の奥がつんと痛くなるのを感じたのだった。

「で、できない……」

「どうして……？」

瞳が潤んだのは高見に気づかれてしまったのだろうか。それとも震えて声を怪訝に思われたのだろうか。

「だって俺……、ホストだから」

訳がわからないと高見は小首を傾げる。

「男をその気にさせる方法なんて知らない」

逆を言えば、女相手なら口説き文句は幾らでも出てくるということだ。

「……なるほど、そうか」

高見はふむと頷いた。一美はこれで高見が気を変えてくれるだろうと期待した。

「それなら黙ってる。誘い文句は最初の一言で、もう充分だ」

「さ、最初のって……?」

さらにまた高見に覆い被さるように申し掛かれて一美は慌てる。

「おまえから誘ったんだろう。俺たちもそういう関係にならないかと」

「だ、だから、あれは冗談だって」

「……、俺にはそう聞こえなかった」

「ちょっと、あんたどんだけ自分に都合のいい耳をしてるんだよ、あっ……」

一美の言葉は、高見のキスで塞がれてしまう。

「んっ、んんっ……」

顔を背けて逃げようとしても無駄であった。

高見の与える口づけは、唇を開くことさえ許されないような強引なキスだった。

「た、高見さん……」

息が出来ないほど苦しくて、窒息してしまうと思う頃によく唇が離れる。

一美は荒い息を吐いて、恨みがましく高見の名前を呼んだ。

だけど高見はキスを止める気はないらしく、唇の代わりに頬へ首筋へとキスを散らしていく。

「ちよ、……つと、マジ……？ 俺、男なんだよ」

高見の熱い息が首筋にかかり一美は息をつめる。

重なる体も布地越しに熱く、そして自分よりも一回りは大きく逞しいその体躯に怖じ気づいた。

抗っても到底太刀打ち出来ないだろうということをまざまざと感じさせるのだ。

高見は慣れた手つきで一美から衣服を剥ぎ取っていく。

気づけば己自身を高見にまじまじと見つめられていて、一美はかっとな頬を染める。

「や、見ないで……、よ……」

中心を隠そうとしたその手を払い除けられた。

高見は一美のまだぐったりとしたそれを握り、やんわりと揉み扱きはじめる。

「あ、やつ……、や……」

一美は肩を竦めて身を振った。

同姓にそんなところを触られるのは、はじめての経験だった。

相手を恐いと思うより、羞恥のほうが勝っている。

とにかく、自分のそれが誰かの手によって形を変える様を目前の男に見られたくなかった。

「も、だめ……、やめろ、ってば……」

「嫌がる言葉なら聞きたくない。黙っている」

なんて酷いことを言う男なのだ。一美は相手を恨みがましく睨むが、悲しいことにそれは続かない。襲ってくる快樂の波に逆らえなかったからだ。

「あ、やつ、もっ……、いく……、イっちゃうから……、高見さ……、手離して……」

「まったく、色っぽい声出しやがって……」

「え……？ あ、うそ……、や、やー、やーっ」

熱を持った大きな手で上下にさらに強く扱かれて、一美はどうとう快樂の蜜を吐き出した。

一美の放った精液が、高見の手にすべて受け止められる。

「ひっ、くっ……」

一美の体がヒクヒクと引きつったように震えていた。

掌にたっぷり吐き出された蜜液を高見はじっと見下ろす。

「き、汚いから、だから手を離せて言ったのに……」

「汚いとは思わない。同じ男だ、見たことくらいはある」

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

極道の愛人

《立読み版》

発行日 2012年2月10日

著者名 泉美 アリナ

イラスト 羽田 共見

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Arina Izumi 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。